



国有林野事業は、公益的機能の發揮に重点をおき、地球温暖化の防止や生物多様性の保全等多様化する国民の要請に応え、開かれた「国民の森林」づくりを推進しているところです。

四国森林管理局では、こうした国有林の管理経営を進めるにあたり、国民各層との双方向の情報・意見などの交換

を図り「親しみのある国有林づくり」を一層推進し、その期待に応えていかなければならないと考えています。そのため、国民や地域社会にも、国有林の管理経営の実態をよく理解してもらい幅広い支援が得られるよう、分かり易い広報・広聴活動を積極的に展開していくことが重要であると考えています。具体的には、

- ① 広報誌「グリーン四国」の発行（四国森林管理局の広報活動の最も重要な媒体として毎月一回発行）
- ② ホームページを活用した新鮮な情報の提供と意見等の募集
- ③ 局・署等が企画する森林環境教育等のイベントや、地域におけるイベントへの積極的な参加による、森林・林業等に関する情報の提供やPR
- ④ 報道機関への積極的な情報提供による、マスメディアを通じた国有林の現況や具体的な取組状況などのPR
- ⑤ 「森林ふれあい館」を活用した広報活動の実施（幅広く一般の各種団体等の方々が活用することで、森林・林業関連等の情報受発信の



「森林ふれあい館」での展示の様子

場として利用して頂きます）

- ⑥ 国有林モニター等の意見や提言等の活用
- ⑦ 小中学生を対象に、森林の働きや林業への関心を持ってもらうことを目的にした、「森林の俳句コンテスト」の実施
- ⑧ などの取組により、「親しみのある国有林づくり」を目指していききたいと考えています。効果的な発信のためにも、皆様の積極的な情報の提供を四国森林管理局へお寄せ下さい。

シリーズ① 四国局の技術開発

『立木密度の変化による林床植生等への影響調査』

〈森林技術センター〉

森林技術センターで実施している技術開発の主な取組について、平成二〇年度は六回シリーズで紹介します。

【目的】

人工林では、水土保持機能の發揮や木材生産などを目的として、苗木を植栽し、森林を造成しています。しかし、植栽木が成長してくると植栽木が込み合い、結果的に、林内に太陽光が届かないことから、下層植生（下草など）が生えず、雨の時に、林内の土壌が流出したり、植栽木の成長が悪くなるなどの問題が発生することから、間伐が必要となってきます。そのため、立木密度を調整（間伐率二〇％、四〇％、五〇％）する試験地を設定し、立木密度が植栽木の成長及び林床植生等、どのような影響を与えるかについて調査しています。

【試験地の位置】

高知県吾川郡いの町奥南川山国有林（二七二よ林小班）

【試験内容】

試験地と隣接森林の無間伐区との成長比較調査や林床（森林の地表面）の植生調査等を森林総合研究所四国支所とともに実施しています。

【これまでの試験結果】

林床植生調査では、無間伐区に比べ間伐実施区では、間伐後多くの樹種が出現し、特に間伐率四〇％区と五〇％区での出現率が著しいという結果になっています。

今後は、間伐率によって林冠（太陽光線を直接受ける枝葉が茂っている部分）の閉鎖する早さに違いが生じることが予想されるので、それに伴う下層植生の成長・消滅の推移を明らかにするとともに、間伐後の植栽木の成長差等を調査していきます。



シリーズ⑦
地域の声

こにふあくらぶ活動について

特定非営利活動法人

こにふあくらぶ

事務局長 関元 泰志



平成八年に香川県林務課(現・みどり整備課)が立ち上げた香川県フォレストボランティアネットワーク(略KFVN)登録制度に登録した会員の中で、啓発活動、里山整備も大切だが、早急に手入れの必要な人工林(杉、桧林)を実質的にかつ、直接的な整備を実施する必要があると考える会員が中心になり平成一一年二月に「こにふあくらぶ」は結成され、同月に第一回活動として香川県東かがわ市で枝打ちを実施しました。今日に至るまで人工林のみの整備を対象にする基本的な考え方に変更はありません。設立以降の実績として、作業



間伐作業

参加延べ人数三、五六七名、作業日数五〇四日、作業箇所五六箇所、作業面積約八二ha(平成二〇年三月末現在集計)となっています。この成果の結集が四国山の日賞の受賞及び林野庁主催の間伐コンクール入賞だと考えております。
当クラブの方針として会員には「労力は提供するが、経費に関してはクラブ内部の責任」となっていますので当然、道具及び機器類ないしは安全器具等の備品及び油脂類、修理等はクラブ

で購買で購入していません。特にチェーンソーに関してはクラブ備品(一部私物)を各会員に貸与し、自己責任で管理をしています。理由としては共有管理だと整備の面で問題が有りますので個人対応にしています。
クラブ員の殆どが何らかの形で過去に研修の経験があり、それなりの知識が基礎になっておりますので、作業適正時期及び作業進捗方法については問題なく進めておりまして基本的に九月〜五月は切り捨て間伐、六月〜八月は竹皆伐及び下草刈り、一〇月〜四月にかけては間伐と同時進行で桧林の枝打ち作業を週二回のペースで実施しています。特に夏場の竹皆伐、刈り払い機を使用しての下草刈りはボランティア作業と思えないほどハードな作業です。
当クラブはこれまで切り捨て間伐を実施してきましたが、今年二月香川県みどり整備課主催の収入間伐及び造材方法の研修会を受講し同月より早々約四〇年生の桧を対象に搬出間伐及び造材に着手しております。取り合えず現段階ではあくまでも試験的なものですが、切り捨て間伐に対するチェーンソーの取り扱いについては、ほぼプロ並と自負していますが、改めて材を無



枝打作業

駄なく伐倒し、かつ造材方法に関するチェーンソー取り扱いについては難しさを感じていますし、今回の作業に於いては会員のチェーンソー取り扱いのレベルアップを感じます。
我々の活動に遊び概念は殆どありませんが、森林整備に対して強く関心をお持ちの方でかつ、情熱の有る方の入会は歓迎致しますので是非連絡を下さい。
また、年一回〜二回程度県外の我々同様の考え方を持つボランティアグループとの協同作業も実施しております。勿論、当クラブの方から自費で参加しますので連絡を下さい。計画をします。なお、過去に高知県八回、徳島県二回の実績があります。作業が前提です。宜しくお願致します。

「こにふあくらぶ」は、平成一九年度「四国山の日賞」(森林整備分野)を受賞されました。

各地の
たより



「わくわくの森」で
植樹と椎茸の植菌作業

(愛媛署)

三月一八日、松野南小学校と締結の「わくわくの森」(遊々の森)でヤマザクラの植樹と椎茸植菌作業の林業体験活動を児童一〇名を含む二二名が参加して行いました。
校長先生からの、「自然と人との共生」についての話しの後、増田先生が筆入れした「わくわくの森」の文字と、児童全員で作成した滑床に生息している動物、植物や川が描かれた二段になった看板の除幕を参加者全員で、大きなかけ声とともに行いました。白い布からあらわれた看板を目にして、児童をはじめ教職員から拍手と歓声があがりました。

次に、宇和島首席森林官から、滑床に生育している樹木と今回、植樹するヤマザクラについての



「大きく育て」と願いを込めて

説明、目黒森林官と新改職員からポット苗の植樹方法の説明と実演を行い、参加者全員で二〇本のヤマザクラを「大きく育て」と願いを込め一本一本ていねいに植え、植樹作業は無事終了しました。

引き続き、管理係長からシイタケの植菌作業についての説明の後、一年生の女の子から教職員も含め全員順番になり、クヌギのほだ木に電動ドリルで穴を開ける作業に挑戦しました。

穴の開いたクヌギは、木槌を持って待ちかまえている子供たちの所に運ばれ、トントンと菌を植え込んでいきます。菌打ち作業があまりにも順調なので、穴開けが間に合わない状況でした。



た。菌を植え付けたクヌギは、学校へ持ち帰りこれから世話をして収穫を待つことになっています。自分たちで植菌した「ほだ木」から椎茸が生えてくる日が待ち遠しいことでしょう。

**「かずら橋」架け替え
用資材の確保に向け
協定を締結**

〈徳島署〉

三好市をはじめ関係者が、国有林を活用して、「祖谷のかずら橋」の架け替え資材・シラクチカズラの安定確保に取り組むため、三月二六日、徳

島森林管理署長と三好市長との間で、「祖谷のかずら橋」架け替え資材確保の森づくり活動に関する協定」を締結しました。

かずら橋の架け替えに必要なシラクチカズラが、近年、減少傾向にあることから、当局が中心となって、徳島県、三好市、有識者、かずら橋保勝会などの関係機関による検討会を開催し、シラクチカズラの増殖方策等について論議してきました。

この度締結した協定は、国有林約六〇haを活用し、三好市が中心となって、シラクチカズラの増殖に取り組むため



のもので、今後、植栽や下草等の刈り払い、採取方法の見直し等を行うこととなります。

貴重な地域の文化財であり、観光資源でもある「祖谷のかずら橋」を後世に残していくためには、シラクチカズラの安定的な確保が必要不可欠です。

今後、国有林を活用した地元関係者の取り組みが実を結ぶことを祈念しつつ調印式を終えました。

なお、この取り組みにはマスコミの関心も高く、調印式でも多数の報道機関から取材を受け、NHKや新聞各紙で報道されました。

**「ふれあいの森」で
ドングリを植える**

〈高知中部署〉

三月二六日、物部川21世紀の森と水の会と協定を結んでいる「ふれあいの森」で、会員等五人がアラカシやコナラ等八種類のドングリを植えました。

今回のドングリ植えは、平成一六年度から一七年度に植栽した木が、その後の乾燥害等で枯れたことから、試験的に実施したものです。

約五千個を植えましたが、会員等は、「一割でも芽がでて育ってくれば」との思いで、作業後の現地を眺めていました。



「早く芽がでて育つことを願って」